The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョージ・ネルソンにおけるオフィス家具デザイン：ミッド・センチュリー・モダン・デザインからの変容
Author(s)	矢部, 仁見
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 74-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56402
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジョージ・ネルソンにおけるオフィス家具デザイン
── ミッド・センチュリー・モダン・デザインからの変容 ──

矢部仁見／京都工芸繊維大学大学院博士後期課程

はじめに

ネルソンはアメリカのミッドセンチュリー・モダン・デザインの代表的なデザイナーのひとりとされる。同じ時代のデザインを創出したデザイナー達が1960年代以降家具デザインから離れていく中，ネルソンはオフィス家具を主軸に家具デザインを継続している。その中にはワークプレイス研究領域等において「革新的アプローチ」,「オフィス計画の状況を変えたその始まり」と評価されるものもあるが，史実上のものとしての新規性という一定の側面のみに止まっている。対してデザイン史領域でのネルソンのオフィス家具についての詳しい取り扱いは少ない。

本発表では既出の評価とは別に，ミッド・センチュリー・モダン・デザインとは視覚的に全く異なるネルソンのオフィス家具デザインをそのデザインのあり方において分析し，そこに何が見出されるかについて考察した。

1．ネルソンの活動概要と視点の在処

ネルソンの活動は家具デザインだけに止まらない。建築・インテリア・展示デザイン，雑誌等への寄稿を含む執筆活動，大学を中心とした教育活動，ハーマンミラー社のデザイン・ディレクター，或いはデザイン会議の組織運営等にも関わっている。

このような活動経歴は，同じアメリカのインダストリアル・デザイナー第二世代と呼ばれるデザイナー達と一線を画すといわれる要因でもあり，その活動の後半期に創出されたオフィス家具デザインに対する思考にも特有の視点をもたらしたと考えられる。

空間の中で相対的に家具デザインを捉える経験的感覚や，ひとりのデザイナーの枠組みを超えてデザインはどうあるべきかと思考する俯瞰的な視点，時代に呼応する現実性への視点はこのような経歴が大きく影響しているといえる。

2．オフィス家具デザインの背景

ネルソンの言説から，少なからずそのオフィス家具デザインに影響を与えたと考えられる背景が三つ挙げられる。

一つはアメリカの商業オフィス建築の発展である。合理的な平面計画のオープン・プラン・オフィス空間の出現をもたらしたこの新しい高層建築についてネルソンは,「そこでは家具も，照明や空調，電気と同じく一つに集約されたものでなく網状の組織のような存在になっていくだろう」と述べ，それまでとは違う広く均質な空間で，家具のあり方も変容していく様を思考している。

二つめにドイツ・クイックボナーチームが発表したオフィス・ランドスケープの概念がある。後年ネルソンは，この概念はオフィス計画に対する革新的な考えであったとし,「これはインテリアデザインでもインテリアデコレートでもなくプロセスである」と述べ，そのデザイン思考に時間や状況による変化への視点の出現が推測される。

三つめにミッドセンチュリー・モダン・デザインの受容の様相が挙げられる。ネルソンは同時代においてそれが一つのファッション・スタイルのように扱われている様相をモダン・デコレーションと称し,「その受容は

真のモダン・デザインの理念の受容ではない」と批判している。この事象もオフィス家具デザインに次なる現代性の追求を求めた背景として重要であると考えられる。

３．オフィス家具デザインの分析と考察

考察対象として，1960年代と1970年代のものを選択した。

「アクションオフィス１」（1964）はオープン・プラン・オフィスを前提としたものとしては，その市場において先駆と位置付けられている。しかし本発表が着目するのは人間工学的に新規であったコンセプトではなく，それまでの執務デスクと大きく異なるデザインである。アルミダイキャスト磨き仕上のブラケット・ベース一体の脚部は構造として合理的な部位からずらされ，側面に目立つようにセットされており，その光沢は広告写真で同時に映り込むアルミナムチェアの美しさに共鳴し，高い美意識を感じさせるものとなっている。

このデザインのあり方は，モダン・デザインの修辞であり，ミッドセンチュリー・モダン・デザインの表現との連関を見ることができるが，さらにそこには空間への視点という新しい意図が出現していると本発表では考察する。その要因としてこの前例の無いオフィス家具シリーズのレイアウトの困難さがある。ネルソンの論説にモダン・デザインの家具の脚が創り出す新しい眺めを「サブ・スケープ」と称して着目したものや，ポロックの絵画に無秩序の中の秩序を見いだす部分と全体という構造への視点の言及が見られることから，その脚部のある種過剰なデザインには，無秩序ともいえるようなレイアウトが予測される空間全体に，秩序を与えるという概念的な空間への視点が推測できるのである。

「ネルソンワークスペース」（1971）は当時代に広まったパネルシステムによるオフィス家具への反駁としてのデザインとされ，その機能性に評価が集まっている。しかしそれとは別にそのデザインのあり方に着目すると，そこに確認できるのは美意識を感じさせる表現がまったく影をひそめ，平凡ともいえるような形態となっていることである。またそのエレメントの組合せの美的なバランスも，ユーザーの自由な選択に委ねられ，それまでのものと大きく異なっている。これはこのデザインの意図が美的な形態表現ではなく，人と関係を持つことで初めて価値が生まれるという状況のデザインにあることを示している。そこには場といわれる現実的な空間への視点を基に，装置としてのデザインへと変容しているネルソンのデザインの有り様を見ることができる。

ま と め

本発表の考察によって，ネルソンの60年代のオフィス家具にはミッド・センチュリー・モダン・デザインに連関を持つ修辞的表現が残されながらも，そこに概念的な空間への視点の出現が見られることが明らかとなった。さらに70年代のものには，場という現実的な空間への視点が出現し，そのデザインは時間や状況と共に変化する装置としてのあり方へと変容していることが明らかになった。

そこにはモダン・デザインの終焉といわれる1960年代以降もなお，デザインにおける自国の現代性の確立を追求するネルソンの変わらぬ意識がみられる。それは世界のトップランナーであるアメリカにふさわしい現代性＝モダンへの意識である。

今後の目標はネルソンのミッドセンチュリー・モダン・デザインの作品群について遡って分析をおこない，その時代のモダンの意味を明らかにすることである。